

連体節における接続形式「トイウ」の挿入条件

李貞姫*

(e-mail: halfmoonlee@hanmail.net)

目次

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 先行研究の検討 | |
| 3. 「トイウ」と主名詞との関わり | 4. 「トイウ」と連体節の構文的要素との関わり |
| 3.1 発話・思考名詞 | 4.1 モダリティ要素との関わり |
| 3.2 こと名詞 | 4.2 構文的要請 |
| 3.3 感覚名詞 | 5. まとめ |
| 3.4 相対性名詞 | |
-

1. はじめに

日本語の連体修飾節構造には、連体節と主名詞¹⁾の間に「トイウ」²⁾という接続形式が現れる場合がある。「～と(人が)言う」という本来の「言う」の意味を保持していない、機能化・形式化された「トイウ」はつなぎことば³⁾と呼ばれ、その介在可否をめぐる問題がある。

[1]褒めて伸ばす{a.という、*b.の}言葉が科学的に証明された。(佐2012.11.8(科))

* 慶北大学校 日語日文学科 博士課程修了、日本語学

1)益岡(2002, pp.93)での用語であり、寺村の「底の名詞」に該当するものである。

2)連体節と主名詞の間の接続形式として、「トイウ」以外に「トイッタ」「トノ」「ヨウナ」などがあるが、ここでは「トイウ」に限定して考察する。

3)寺村(1981, pp.108)での用語である。

[2]中国が米国選手団を招待する{a.という、b.∅}話がまとまった。

(佐2013.2.10(国))

[3]竹がパチパチとはじける{*a.という、b.∅}音を鳴らし、炎をあげた。

(佐2013.1.8(佐))

「トイウ」の介入が[1]では必須であるのに対して、[2]では任意であり、[3]では不可である。連体節における「トイウ」の介入可否が主名詞の意味特性と深く関わると考え、「トイウ」の挿入条件の一つとして主名詞の意味特性を検討する。外の関係⁴⁾の修飾表現においては連体節が主名詞に関する説明を与えるのであるから、当然の帰結として、主名詞は何らかの説明を要求するタイプのものに限られる。具体的にどのような類型の名詞が主名詞の位置に立ち得るかは、重要な検討課題となる。主名詞の類型を調べることはまた、外の関係の内容の多様性を明らかにする上でも有意義である。

また、「トイウ」の介入は連体節の内部構造による側面もあり、推量表現、意志表現、終助詞などのようなモダリティ要素が現れる場合も「トイウ」の介入が必要とされる。

そこで、本稿では、先行研究の結果を十分踏まえた上で、実例分析を通して「トイウ」の挿入条件の検討を試みる。研究範囲は、連体節の中でも特に外の関係にある連体節に出現する「トイウ」に焦点をしばる。

2. 先行研究の検討

連体節における「トイウ」の挿入条件を扱った先行研究には、主名詞の意味特性に着目した寺村(1975～1978、1981)、Terakura(1983)、大島(1991)などと、連体節の述部の構文的要素とのかかわりについて研究した寺村(1981)、益岡(2002)などが挙げられる。

まず、寺村(1981)では、主名詞の内容を表す文を連体節として前接させる場合、「トイウ」は「必須」「任意」「不可」という三つの現れ方をすると述べている。寺村の主名詞の分類と「トイウ」の介入可否との関係をまとめると次の【表 I】ようである。

4)寺村(1975～1978、pp.192～196)にしたがったものである。

「内の関係」： 連体節の述語と主名詞の間に特定の格関係が成り立つもの

①さんまを焼く男

「外の関係」： 連体節が底の名詞の内容を述べたり、あるいはその内容を補充するもの

②さんまを焼く匂い

【表Ⅰ】 寺村における主名詞の分類

修飾部	主名詞	名詞群	トイウ
内容 補充	発話・ 思考名詞	言葉、文句、手紙、電報、申し出、噂、… 思い、考え、意見、気持、決心、思想、…	必須
	「コト」名詞	事実、事件、記憶、習慣、風習、過去、 作業、仕事、技術、方法、目的、必要、…	任意
	感覚名詞	音、匂い、味、感じ、様子、姿、有様、…	不可
相対 補充	相対性名詞	上、下、前、後、翌日、背後、中、反面、一方、 原因、結果、理由、動揺、悲しみ、焦り、不安、…	

しかし、寺村の一般則に反する次のような反例が挙げられる。

- [4] 野菜を作って送る思いを強くした。
- [5] 何故かみんな完璧に踊っているという姿に、もう訳がわからないまま涙が止まりま
せんでした。 (朝2012.11.22(経))
- [6] 花が咲くと春が来たという感じがする。
- [7] 9割近くが就職難のため、今後の人生に不安を抱いているという結果が出た。
(佐2013.1.13(社))
- [8] 子育て期間に社会から取り残されるという焦りを感じる。 (twitter.com)

寺村では、「思い」は発話・思考名詞に属しており、「トイウ」の介在が必須であるとしているのに対して、例文[4]では介在されていない。また、「姿・感じ」は感覚名詞に、「結果・焦り」は相対性名詞に分類されており、「トイウ」の介在が不可であるとしている。それに反して、[5]～[8]では介在されている。そこで、連体節における「トイウ」の介在可否をめぐって、主名詞の意味特性をもう少しきめ細かく検討する必要がある。

次に、Terakura(1983)は「トイウ」の介在をめぐって、主名詞を3つに分けており、その関係をまとめると次の【表Ⅱ】ようである。

【表Ⅱ】 Terakuraにおける主名詞の分類

主名詞	名詞群	トイウ
propositions	考え 確信 結論 意見 主張 理論 仮定 知らせ 噂 話 伝説	obligatory (義務)
facts	事実 結果	optional (任意)
events & sensations	事件 出来事 状態 現状 行為 動作 しぐさ 課程 歴史	
	感じ 気 匂い 音	unacceptable (不可)

しかし、Terakuraでは「トイウ」の介入が義務とされている「噂」「話」は「トイウ」なしでも使われる。「感じ」「気」も「トイウ」が介入される場合がある。

[9] 中国が米国選手団を招待する話⁵がまとまった。

[10] また先週には、石碑に赤いペンキがかけられるという騒ぎも起きていた。

(朝2011.8.8(国))

[11] 花が咲くと春が来たという感じがする。

[12] きっと世界中の人が幸せになれるという気がした。

また、大島(1991)は、「トイウ」が必須となる条件は連体節が言語による表現行為を経ていることが含意される場合であるとまとめ、「記事、コピー、言葉、報告、意見、教訓」などの名詞を挙げている。「トイウ」が任意である構造において、「当該の事態を連体節の形で表現してみるとどうか」を話し手が意識している場合、「トイウ」が介在するとしており、「実感、不安、誇り、度胸、例、練習、強さ、事実」などの名詞が属すると指摘している。

最後に、連体節の述部の構文的要素とのかかわりについて、寺村(1975～1978、1981)は連体節の述部に断定、命令、依頼、誘い、「ハ」終助詞などのような外見的特徴があると必ず「トイウ」が用いられるとしている。しかし、他のモダリティ要素や省略表現、引用表現などによる構文的な要請とのかかわりについては言及していない。一方、益岡(2002)は「トイウ」が介在しても主名詞の意味特性によって現れるモダリティ要素が異なると指摘しており、南(1993)⁵⁾の「描叙」「判断」「提出」「表出」という文の4段階を用いて、引用系名詞⁶⁾は「提出」の要素まで現れ得るのに対して、コト系名詞は「判断」の階層に属する要素まで現れ得るとしている。

3. 「トイウ」と主名詞との関わり

「トイウ」の挿入条件の一つとして、主名詞との関わりを考察する。この際、連体節の

5) 南(1993, pp.122-136)は、文の構造を4つに分けている。

①描叙段階：格、受身、使役、aspect、状態副詞、程度副詞など

②判断段階：述語の丁寧形・打ち消し形・テンス、ノダ、ワケダ、みただ、ようだ、らしいなど。

③提出段階：ダロウ、デショウ、「ウ・ヨウ・マイ」「ハ」陳述副詞の「マサカ」「ダブン」など

④表出段階：命令、勧誘、疑問、終助詞など

6) 益岡(2002, pp.105-106)は、寺村のいう「発話・思考名詞」を「引用系名詞」、「コト名詞」を「コト系名詞」と呼んでいる。

述部は動詞や形容詞の現在形・過去形でおわるもので、モダリティ要素を含まない中立命題を対象にする。

3.1 発話・思考名詞⁷⁾

3.1.1 発話名詞

発話・伝達行為を表すもので、何かを言うことに関係している名詞群である。「トイウ」の介在が必須となり、次のような名詞が挙げられる。

言葉 手紙 依頼 申し出 激励 誘い 返事 電話
噂 評判 命令 相談

- [14] 褒めて伸ばす{a.という、*b.∅}言葉が科学的に証明された。
(佐2012.11.8(科))
- [15] 大学進学を保証する{a.という、*b.∅}申し出を受けた。
- [16] 両親から家族に非常に悲惨なことが起きた{a.という、*b.∅}手紙が届きました。
(朝2012.10.3(社))

3.1.2 思考名詞

思考名詞は思考・思念の内容を表すもので、何事かを思うことに関係している名詞群である。「トイウ」の介在が任意となる。

考え 気持 思い 意見 期待 意思 信念 思想 気 決心 …

- [17] 安全安心の食材を自分たちで作る{a.という、b.∅}考えに共感した。
(佐2012.4.2(佐))
- [18] a このチームとやるときは絶対に勝つという気持ちで挑んでいる。
(朝2013.2.21(ス))
b 全てを懸ける気持ちで闘いたい。
(佐2013.2.13(ス))
- [19] a 様々な氏族の対立が内戦を呼び、ソマリアに深い傷を残したという思いからだ。
(朝2013.2.23(国))
b 野菜を作って送る思いを強くした。

3.2 こと名詞

3.2.1 事実名詞

抽象的な「こと」を表す名詞群で、「トイウ」が介在してもしなくても、実質的な意味にはほとんど影響がない。連体節の内容がより完全な文の形で表されており、節が多く来るタ

7) 主名詞の4分類は寺村(1975~1978, pp.261-297)にしたがったものである。

イ⁸⁾のもので、主に「ガ」格が現れる。

話 事件 事実 騒ぎ 夢 可能性 恐れ 過程 くだり 可能性

[20] 中国が米国選手団を招待する{a.という、b.∅}話⁸⁾がまとまった。

(佐2013.2.10(国))

[21] イスラエルで拘束されていたパレスチナ人が死亡する{a.という、b.∅}事件がある。

(朝2013.2.26(国))

[22]a また先週には、石碑に赤いペンキがかけられるという騒ぎも起きていた。

(朝2011.8.8(国))

b 数千人が避難する騒ぎとなった。

3.2.2 事柄名詞

連体節に「節」というより「句」が多く来るタイプのものである。つまり、節の「独立性」が非常に低く、主名詞に対する形容詞のような役割になっている。主に「ガ」格以外の補語によって、一般的・抽象的・概念化された動作や出来事・状態が表される名詞群である。「トイウ」の介在が任意となり、次のような名詞が挙げられる。

癖 作業 仕事 習慣 資格 商売 方法

[23] イライラすると爪を噛む{a.という、b.∅}癖が生涯治らなかったと言われる。

(佐2009.6.18(文))

[24] 定型情報を何度も何度も入力する{a.という、b.∅}作業が発生します。

(朝2012.11.28(経))

[25] 私は最近、近くの住宅地にチラシを配る{a.という、b.∅}仕事を始めました。

3.3 感覚名詞

3.3.1 感覚性名詞

視覚、聴覚などと直接的な認知関係をもつ名詞群で、その内容を文の形で表して連体節にすることができる。話し手が直接体験している内容を述べていく場合には、その知覚と同時的に描写していく述べ方が選択され、「トイウ」の介在が不可となる。

音 足音 匂い 味 色

8) 節が多く来るタイプ、句が多く来るタイプという分類は寺村(1981)での用語である。

[26] 竹がパチパチとははじける{*a.という、b.∅}音を鳴らし、炎をあげた。

(佐2013.1.8(佐))

[27] さばを焼く{*a.という、b.∅}匂い。

[28] 床を踏みしめる{*a.という、b.∅}足音。

3.3.2 知覚性名詞

感覚器官を通して外界の事物や身体内部の状態を知る働きをもつ名詞群で、「トイウ」の介在が任意となる。

感じ 様子 姿 風景 有り様 様相 景色 気配 状況

[29]a 花が咲くと春が来たという感じがする。

b 木村は昨日より慣れてきた感じがある。

[30]a 道路や橋などは仮設としてかろうじて整備がすすんでいるという様子でした。

(佐2012.9.10(行))

b 猫に近づく様子が写っているのが確認され、逮捕の決め手となった。

(佐2013.2.14(社))

[31]a 財政にも目配りするという姿がしっかり出てくるかどうかが大それた。

(朝2012.12.26(経))

b こうしてはれ舞台で輝く姿を見ると、まだまだやめられんね。

(佐2013.2.17(佐))

3.4 相対性名詞

連体節で表される内容が主名詞の相対概念の内容、または連体節が「因」、主名詞が「果」という関係にある名詞群である。

3.4.1 空間・時間的 相対名詞

時間的・空間的な前後関係にある名詞群で、連体節で表される内容が主名詞の相対概念の内容を補充しており、この際「トイウ」の介在が不可となる。

上 下 前 後ろ 右 左 翌日 背後 反面 一方

[32] 学校へ行く{*a.という、b.∅}前にご飯を食べる。

[33] 男子生徒が顧問から体罰を受けた{*a.という、b.∅}翌日に自殺した。

(朝2013.1.10(社))

3.4.2 因果関係

連体節が主名詞の表す事態の原因を表しており、連体節と主名詞の間に因果関係が成り立つものである。連体節が「因」、主名詞が「果」という関係にある名詞群で、この際「トイウ」の介在は任意となる。特に、感情名詞は名詞単独では相対的な性質をもっていないが、連体節の構造では因果関係が成り立つ。

因果名詞：罰 結果 勢い たたり 反動 しかえし 原因 理由
感情名詞：悲しみ 不安 焦り 怒り 喜び つらさ 楽しみ

[34]a 嘘をついた罰として掃除をした。

b…、ユヴェントスに3-0の勝利を献上し、チャンスを逃すという罰をくらった。

(朝2013.2.13(ス))

[35]a約1か月間、一般から意見を公募した結果、約3万件の意見が寄せられ、無償化対象にしない方針への賛成意見が反対意見をわずかに上回った。

(佐2013.2.9(教))

b9割近くが就職難のため今後の人生に不安を抱いているという結果が出た。

(佐2013.1.13(社))

[36]a今年もシングル曲2作、初アルバムを発売した勢いで、夢を実現させた。

(朝2012.12.28(エ))

bライブの発案から48時間でチケットが完売するという勢いで進んだ。

(朝2011.3.28(特))

[34]a～[36]aでは連体節が“原因”を表しており、主名詞が“結果”の事態を表す関係を形成する相対補充となり、この場合には「トイウ」を介在させることはできない。これに対して、[34]b～[36]bのように「トイウ」が介在されると連体節が“結果”の事態を表すことになり、主名詞の内容を説明する内容補充の関係を形成する。

一方、感情名詞の場合、“原因”の事態を表す連体節と主名詞の間に「トイウ」が介在しても、因果名詞と異なり、連体節が“結果”の事態として解釈されない。[37]、[38]では、「トイウ」の介在に関係なく、連体節は“原因”を示し、主名詞は因果関係の“結果”として生じる心的状況(「悲しみ」、「不安」)を表している。

[37]a 自然の厳しさやふるさとを失う悲しみをつづっている。

(佐2012.12.8(佐))

b 父親を殺されるという悲しみを背負った者、…。

(朝2006.9.4(B))

[38]a 戦地に行く不安を打ち明ける若い兵士がいた。

(朝2013.7.14(政))

b 仕事が減るという不安があります。

以上をまとめると、①「トイウ」が必須となる場合は発話名詞、②任意となる場合は思考名詞、事実名詞、事柄名詞、知覚性名詞、因果名詞(内容補充の場合)、感情名詞であり、③不可となる場合は感覚性名詞、空間・時間的相対名詞、因果名詞(相対補充の場合)である。

4. 「トイウ」と連体節の構文的要素との関わり

4.1 モダリティ要素とのかかわり

連体節という形で主名詞に前接する際、連体節の述部にモダリティ要素が現れると「トイウ」の介入が必要となる。まず、寺村(1981)は、連体節に次のような外見的特徴が備えているものは必ず「トイウ」が用いられるとしている。

- ① 「～は」という題目がある。
- ② 「だ」「です」で終わる強い断定の文である。
- ③ 「～しろ、しなさい、してください」などの命令、依頼の表現である。
- ④ 「～しよう」などの誘いの表現である。
- ⑤ 「か」「な」「かな」などの終助詞ないし、それに準ずる文末の表現をもっている。

この他にも、[39]～[42]のように「トイウ」が任意であるような用法をもつ主名詞でも連体節の述部に推量表現・意志表現・当然表現・希望表現などをとると、主名詞との間に必須的に「トイウ」が介入されており、「トイウ」がつなぎことばの役割をしている。

- [39]a この大手取引会社が近く、日本市場から撤退して主戦場をシンガポールに移管するらしいという話しが広がっている。(朝2012.8.8(経))
- b 私たちが漠然と「米国的」と受けとめてきたデザインや生活様式が、少なからずカリフォルニア発だったかもしれないという可能性に改めて気づかされる。(朝2013.4.4(文))
- [40] 世界的な経済不安から資産を確実に価値がある金にして守ろうという意識が働いているのでは」と話す。(佐2013.2.22(経))
- [41]a 教科にすべきだという意見が大勢を占めた。(佐2013.2.15(政))
- b 世界中の人が「Windows Phone 7」に夢中になるはずだという願いを込めたマイクロソフト公式CMムービー…。(佐2010.10.19(く))
- c 責任を取らなければならないという認識はないと引責辞任の考えはないことを明

らかにした。

(佐2011.810(政))

[42]a 今後はスポーツ界から暴力をなくしたいという思いから告白したようだ。

(佐2013.2.13(ス))

b 優しさと幸せをもたらす、愛される雌として成長してほしいという願いが込められているという。

(佐2012.10.5(ク))

当然表現・意志表現などは「陳述度⁹⁾が高い」とされる形式である。陳述度が高いということは、言い換えれば節であってもそれだけ独立した発話に近いということであり、実際の発話、もしくは思考の状況をそのままつしたものに近いので、直接引用と類似した構文をなしている。「トイウ」はもともと「と+いう」であると考えられるが、このうちの「と」は引用を表わす表現である。

これについて、寺村(1975~1978)は、「トイウ」の介在可否、あるいは強制的か任意かという構文的な問題は、引用の「…ト」に対応する意味と関わりと指摘した上で、次のように述べている。

「トイウ」は、主名詞にその内容を(文の形で)表す連体節の陳述度＝モダリティが高ければ高いほど必要であり、それが低くなる、渡辺文法流に言えば「叙述内容」、ファイルモア流に言えば'proposition'を表すだけなら、それは不要、または邪魔になる。

ただし、寺村のように、「叙述内容、proposition」を表すだけなら「不要、または邪魔になる」と考えることには疑問がある。「トイウ」が任意の場合にあえてそれを介在させることによって、ニュアンスの差が生じることがあるからである。例えば、[43]~[45]のように「トイウ」が任意の場合、「トイウ」が介在しても実質的な意味にはほとんど影響がない。しかし、「トイウ」が介在すると当該の事態をどう表現するか、話し手が意識することになり、話し手の何らかの主観的な評価が込められているように感じられる。これに対して、「トイウ」がない場合には、主名詞である「事件」「仕事」「感じ」を限定する働きをして、そのような話し手の評価は感じられない。つまり、「トイウ」が介在すると、評価の対象¹⁰⁾と

9) 寺村(1975~1978, pp.269)は「外の関係」と関連し、形態的側面から連体節の陳述度、モダリティの度合いを五段階に設定している。

(低)						(高)
1	→	2	→	3	→	4 → 5
動詞現在形		～ラシイ		～ダ		丁寧体 終助詞
動詞過去形		～ダロウ		～ノダ		
形容詞現在		～カモシナイ		～ハズダ		
形容詞過去		意向形		…		
～だった		推量形		命令形		

10) 中島(1990, pp.49)で呼ばれた用語である。

しての意識がかかわると考えられる。

[43] 中学生一人が死亡する{a.という、b.∅}事件があった。

[44] チランを配る{a.という、b.∅}仕事をはじめました。

[45] 花が咲くと春が来た{a.という、b.∅}感じがする。

ところで、「トイウ」が介在すれば、あらゆる主名詞に陳述度の高い要素が現れるのではない。主名詞の意味特性によって、連体節の陳述度に差があり、現れるモダリティ要素が異なる。これについて、寺村(1975～1978)は陳述の度合いが発話→思考→コト→感覚、相対性名詞という順に減っていき、単なる叙述内容、propositionになっていくとしている。

外の関係については連体節の内部にどのような範囲の要素が現れるかという視点も重要である。そして、この点を整理する上でも主名詞の種類に注目することが有益である、ということが指摘されてきた。

しかし、寺村の指摘に反して、実例に当たってみると、発話名詞でも限られた要素だけが現れる場合もあれば、単なるpropositionを取るとされる相対性名詞でも広範囲の要素が現れる場合がある。ここでは、その具体例として、「誘い」「癖」「不安」という3つの名詞の場合を取り上げる。

例えば、「誘い」は「トイウ」の介入が必須である発話名詞であり、陳述度1に属する動詞の現在形は現れることができず、陳述度2に属する「～(よ)う」と、陳述度5に属する終助詞「か」だけが現れる。これに対して、「癖」は「トイウ」の介入が任意である事柄名詞であり、陳述度1に属する動詞の現在形だけが現れ得る。これは3.2.2で指摘したように、事柄名詞は連体節に「節」というより「句」が多く来るタイプのもので、節の「独立性」が非常に低く、主名詞に対する形容詞のような役割をしているので、陳述度の高い表現は現れにくい。

[46]a* 飲みに行くという誘いを受けた。

b 飲みに行こうという誘いを受けた。

c* 飲みに行くべきだという誘いを受けた。

d* 飲みに行きますという誘いを受けた。

e 飲みに行くかという誘いを受けた。

[47]a いらいらすると爪を噛むという癖がある。

b* いらいらすると爪を噛むだろうという癖がある。

- c* いらいらすると爪を噛むのだという癖がある。
- d* いらいらすると爪を噛みますという癖がある。
- e* いらいらすると爪を噛むかという癖がある。

一方、「不安」は「トイウ」が任意である感情名詞で、連体節の中に陳述度の高い「かもしれない」、終助詞「か」などが現れており、単なる叙述内容だけではなく、モダリティ要素も取り得る。

- [48]a? 大津波が来るという不安がある。
- b 大津波が来るかもしれないという不安がある。
- c? 大津波が来るはずだという不安がある。
- d* 大津波が来ますという不安がある。
- e 大津波が来るのではないかという不安がある。

以上の検討の結果をまとめると、「トイウ」の介入はその前に来る連体節の内部構造だけから言えるものでもなく、またその後に来る主名詞の種類だけから言えることでもない。両方が、いわば相関的に「トイウ」の介入を条件づけているのである。つまり、主名詞の意味特性と連体節の構造との相互関係で決まる。

4.2 構文上の要請

主名詞の特性ではなく、構文上の要請から「トイウ」が介入される場合がある。

まず、連体節が直接話法(引用)に近い用法を持つ場合、「トイウ」が必須となる。“引用”という形式の機能は、ある人物の発言・思考を言語で表現するということである。特に直接話法は文章の中で他人の言葉を引用するとき、そのままの形でひき写すことに重点がある。それゆえ、連体節の場合でも“引用”のマークとして「トイウ」が用いられるのであろう。英語のクォーテーション・マークに相当するカッコ「……」つまり、直接引用が出てくる場合「トイウ」の介入は必須となる。[49]でも、終助詞「よね」が用いられていることから直接話法に近いことがわかる。

- [49] 同世代で会う機会があると、「子育てって色々お金かかるよね」という話になります。(朝2012.11.26(マ))

次に、省略表現の場合にも「トイウ」が必要である。[50]では「英語で英語の授業を」の後に「する」が、[51]でも「ほしい」が省略されており、完全な形ではない文(不完

全文)をとる際にも「トイウ」は必須となる。

[50] 高校でも英語で英語の授業をという計画が進行中である。(朝2013.5.4(声))

[51] 太い麺にたっぷりもやし、独特のソースとともに、浪江を、福島を忘れないで
いう思いを届ける。 (朝2013.5.4(地))

また、連体節が複文である場合、「トイウ」で一度内容をひとまとまりにする必要性が生じる。[52]では、3つの節に渡って「ひけめ」を感じる原因を述べており、範囲全体を一旦まとめて後に続けるために「トイウ」が必要とされる。

[52] だが、あの戦争に参加し、戦友や部下を失い、自分は生きて帰ったという
「ひけめ」から戦争の体験を身内にも話さなかった。 (朝2013.5.3(声))

さらに、連体節と主名詞の位置が遠い場合、どの名詞を修飾するのか関係が曖昧になるので、連体節の内容であることを「トイウ」で示し、修飾を受ける主名詞をはっきりさせる役割をしている。

[53] セミナーでは、「どうしたら売れる営業パーソンになれるか」という仕事に直結する内
容で、実際に当社の営業担当者も学んでいる営業のコツ、ノウハウを 伝えます。
 (朝2013.2.25(社))

5. まとめ

連体節に現れる「トイウ」の介在可否は、主名詞の意味特性と連体節内部の構文的要素に関わる。

まず、主名詞の意味特性による「トイウ」の挿入条件をまとめると次のようである。

連体節	主名詞	主名詞下位分類	名詞群	トイウ
内容補充	発話・思考名詞	I 発話名詞	言葉 手紙 依頼 申し出 激励 誘い 返事 電話 噂 評判 命令 相談	必須
		II 思考名詞	意見 思い 気持ち 意思 信念 思想 気 決心 考え 期待	任意
	こと名詞	III 事実名詞	話 事実 事件 夢 可能性 恐れ くだり 騒ぎ 過程	任意

	感覚 名詞	IV	事柄名詞	作業 方法 癖 習慣 資格 仕事 商売	
		V	感覚性名詞	音 匂い 味 色 足音	不可
		VI	知覚性名詞	感じ 姿 風景 有り様 様子 様相 景色	任意
	相対性名詞	VII	因果名詞	罰 結果 勢い 反動 しかえし 理由 原因 たたり	任意
相 対 補 充	相対性 名詞	VIII	空間・時間的 相対名詞	上 下 前 後ろ 右 左 翌日 背後 反面 一方	不可
		IX	因果名詞	罰 結果 勢い 反動 しかえし 理由 原因 たたり	
		X	感情名詞	悲しみ 不安 焦り 怒り 喜び つらさ 楽しみ	任意

次に、連体節の内部の構文的要素として、推量表現、意志表現、断定表現、希望表現、終助詞などのモダリティ要素が含まれると陳述度が高くなり「トイウ」の介在が要求される。連体節の内部に現れ得る要素の範囲は主名詞の種類によって異なり、広範囲の要素が現れる場合もあれば、限られた要素だけが現れる場合もある。

また、省略表現、引用表現、連体節が複文である場合や連体節と主名詞の位置が遠い場合も「トイウ」が必須となる。

「トイウ」の介入はその前に来る連体節の内部構造だけから言えるものでもなく、またその後に来る主名詞の種類だけから言えることでもない。両方が、いわば相関的に「トイウ」の使用を条件づけているのである。

【参考文献】

- 大島資生(1991)「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」
『人文学報』225、東京都立大学 人文学部、pp.27-58
- 大田陽子(2000)「「という」を用いた連体修飾表現について」
『東京大学留学生センター紀要』第37号第2分冊、pp.53-85
- 白川博之(1986)「連体修飾節の状況提示機能」『言語学論叢』5、筑波大学
- 金銀淑 (1989)「連体修飾構造における「という」の意味機能」
『国語学研究』29号、東北大学文学部「国語学研究」刊行会、pp.21-33
- 寺村秀夫(1975~1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その1~その4—」
『日本語・日本文化』4号-7号、大阪外国語大学学生別科、pp.269-296
- _____ (1981)「連体修飾その3」『日本語の文法(下)』、国立国語研究所
日本語学論説資料第35号 第2分冊、pp.106-119
- 徳田由美子(1989)「「という」の使い方の研究」
『日本語学科年報』11、東京外国語大学
- 中右実 (1973)「日本語における名詞修飾構造」『月刊言語』二月号、大修館書店
- 中畠孝幸(1990)「「という」の機能について」
『阪大日本語研究』2、大阪大学文学部日本語学科、pp.43-55
- 藤田保幸(1991)「引用と連体修飾」『表現研究』54号、表現研究学会、pp.26-34
- 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版、pp.25-45
- _____ (2002)『複文と談話』岩波書店、pp.93-116
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店、pp.122-136
- Terakura, Hiroko (1983) "Noun Modification and the Use of To Yuu", Journal
of the Association of Teachers of Japanese, 18:1, pp.23-55

【用例出典】

1. 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(発行:新潮社 1995)
『孤高の人』(孤)
2. 朝日新聞記事データベース
(無料記事検索)(<http://www.asahi.com>)
3. 佐賀新聞記事データベース
(1994年1月~2013年4月)(<http://www.saga-s.co.jp>)

日々と記事出典別の順で示す。以下、記事出典別の略語である。

総合(総)、国際(国)、経済(経)、地方(地)、スポーツ(ス)、社会(社)、文化(文)、ひろば(ひ)、論説(論)、特集記事(特)、情報(情)、教育(教)、ライフ(ラ)、エンタテインメント(エ)、マイタウン(マ)、ビジネス(ビ)

4. インターネット用例(twitter.com/respect)

※例文中、出典の明記がないのは筆者の作例である。

要 旨

本稿は外の関係にある連体節に現れる「トイウ」に焦点を当て、挿入条件の検討を試みた。「トイウ」の介在可否は、主名詞の意味特性と連体節内部の構文的要素に関わる。

主名詞の意味特性によって、①発話名詞は必須であり、②思考名詞、事実名詞、事柄名詞、知覚性名詞、因果名詞(内容補充の場合)、感情名詞は任意であり、③感覺性名詞、空間・時間的相対名詞、因果名詞(相対補充の場合)は不可である。

また、連体節の内部の構文的要素としてモダリティ要素が含まれると陳述度が高くなり、「トイウ」の介在が要求される。省略表現、引用表現、連体節が複文である場合や連体節と主名詞の位置が遠い場合も「トイウ」が必須となる。

「トイウ」の介入はその前に来る連体節の内部構造だけから言えるものでもなく、またその後に来る主名詞の種類だけから言えることでもない。両方が、いわば相関的に「トイウ」の使用を条件づけているのである。

キーワード：連体節、外の関係、トイウ、主名詞、モダリティ、陳述度

투 고 : 2013. 5. 31
1차심사 : 2013. 6. 15
2차심사 : 2013. 7. 6